



第79回 新型コロナ感染とオンライン飲み会

▼新型コロナ感染とオンライン飲み会

新型コロナ感染の蔓延で、居酒屋やレストランなどに出かけることがほとんどなくなってしまった。医療関係者であるため、感染機会をなるべく減らすために行動制限が厳しいのだ。対面の会議も減って、首都圏で開催される学会もすべてオンライン参加となった。この変化で、私たちは必ずしも学会や会議のために遠隔地まで出かけなくてもよいことに気づいてしまった。オンラインを使えば、東京だろうとアメリカだろうと、壁はないのである。

▼オンライン飲み会

それでも同僚や友人とリラックスしてコミュニケーションをとりたいと思えば、オンライン飲み会がある。これはインターネット経由の会議ツールのZOOMやGoogle meetを使って、メンバーが集まり、各自の自宅からアルコールとつまみ片手に参加するオンライン上の飲み会である。ためしに職場メンバーでもやってみたが、画面上でみんなの顔を見つつ酒を飲んでも、どこか隔てられた感が否めなかった。発言も順番になるし、声のトーン、表情やしぐさがもう一つつかみづらい。そして、対面の飲み会で生まれるグルーブ感（ノリのよさ、一体感、高揚感）とでもいうような感覚が生まれにくいのだ。では、場のグルーブ感とは何だろうか。リアル飲み会をよく観察すると、10名程度で集まった会でも、会話するグループは数名単位で分かれている。入れ替わりがあるにしても、10名全員が均等に会話に参加するということはない。そうか、オンライン飲み会はテーマにそって順番に話すという会議っぽい形式が残っているので、そばにいる人に話しかけるような自由な発話がしづらいのだ。

▼コミュニケーション今昔

新型コロナ感染の蔓延で、オンラインでの仕事や会議、さらには飲み会まで、コミュニケーションの様相が、がらりと変わってしまった。いまはメールでのやり取りは当たり前で、同じ資料を共有ツールで眺めて、

相手の顔をみながらオンライン会議というのも可能である。便利な時代になったものだ。そもそも、最近の若者は先輩と酒を酌み交わして交わることを、面倒くさがる人も多い。「飲みに行こう」という表現がすでに古くさいという。これからはオンライン飲み会（交流会）のように、各自が自由なスタイルで、飲み物を片手に気楽に交わる形が徐々に広まっていくのかもしれない。でも昭和世代の私としては、居酒屋で少し酔いが回って饒舌になったり、日頃言いたくても言えなかったことが話せたり、すぐそばにいるからこそ、というリアル飲み会ならではの長所も大切にしたい、と思うのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)